家庭における幼児の英語学習教材の活用とその効果に関する研究

Practical Uses and Effects of English Language Learning Materials Designed for Younger Children

豊田ひろ子
Hiroko TOYODA
杏林大学
Kyorin University

Abstract

In this study, six Japanese children (aged 4 to 6) and their Japanese parents (mainly mothers) were observed to investigate how they used English learning materials designed for younger children and what effects the materials had on the children's learning. Suggestions were made with regard to effective ways of providing parental support. The English learning materials that children used were from the correspondence package *Oyakoeigo* developed by Japanese publisher Benesse Corporation and delivered bimonthly for a year. A package includes a video (or a DVD), and some of the following items: a CD, a workbook, a Cocopad (a talking machine used with an electric book and a special pen), a toy or a game. Children and parents generally were observed to enjoy learning English together. Children were responsive to English songs and danced to music by following the instructors' movements shown in video. Children who were supported by parents during language activities developed English ability in pronunciation, vocabulary, and body language, while an unassisted child did not. When parents and children were watching a video together, parents were able to support children the best, and children spoke the most English. A five-year-old girl became capable of reading some lines of an English story after she listened to it on CD. In an English language activity, a four-year-old boy spontaneously played the role of chef and cooked a dish for his mother. In a card game, a boy could appropriately use the gesture for "Good job!" by putting one thumb up. In another card game, a family got together and had fun using English expressions such as "They (cards) match." "They don't match." This type of language learning materials seems valuable, especially when parents actively interact with their children and the materials.

Keywords

teaching children English, English as a foreign language (EFL),
English language learning materials

1. はじめに

最近まで，日本の一般家庭では，幼児が親と一緒に英語学習をすることは稀であった。お稽古事のひとつとして英語教室に行く子どもがいる一方で，通常家庭で英語を習う子どもは，国際結婚家庭型環境（八代 1991）に生まれ，英語を母語とする親とコミュニケーションするために英語を習得（例：山本 1996）していた。しかし，今小学校で英語が必修化となる動きもあり，出版社が幼児・児童向けの英語教材を商品開発している。通信販売で購入する高価な学習セットから，書店で買える英語のDVDやCD，絵本など，さまざまな教材がある。本研究は，2005年4月～2006年3月に（株）ベネッセコーポレーションが開発した幼児向け英語学習通信教育コース「おやこえいご」を受講した4歳～6歳の子どもたち（6名）が家庭で英語学習する様子をビデオに録画し，その実態を調査した。まず，子どもたちが取り組んだ「おやこえいご」の概要を述べ，次に，子どもの英語学習の実態を記述し，最後に英語学習教材を効果的に活用するための提案を述べたいと思う。

2. 「おやこえいご」の概要

ベネッセは，幼児向け保育教材「こどもちゃれんじ」を受講している会員を対象に，幼児向け英語学習通信教育コース「おやこえいご」を開発し，2003 年1月に販売を開始した。教材は2ヶ月に1回，奇数月に各受講者の家庭に配送される。『じゃんぷ』（5歳～6歳向け）と『すてっぷ』（4歳～5歳向け）があり，2006年3月には『ほっぷ』（3歳～4歳向け）が開講された。教材の内容は，子どもの年齢に合わせて，子どもが興味を持って楽しめるもので構成され，毎回配送される視覚＆音声教材ビデオ（又はDVD）に加え，音声教材CD，ワークブック，電子ペンで音声が聞ける学習教材ココパッド，玩具，カードやポスターなどの紙付録など，さまざまなメディアを用いて，楽しい遊びを繰り返しながら英語に触れられるようにしている。

「おやこえいご」は，小学校入学後の英語教育と，英語を生かした将来の活動を視野に入れ，積極的な英語学習者となり，有能なコミュニケーターとなれるように，まず，子どもが英語を好きになり，英語を学びたいという気持ち，すなわち英語習得に必要な基本的なレディネスを創ることを目指している。2年目の『すてっぷ』では，英語の音やリズムを多くインプットし，真似をしたり，英語を聞いて体を動かしたり，歌に合わせて体を動かしたりして，英語にたくさん触れながら自然に英語を積み上げることを目指す。3年目の『じゃんぷ』では，継続して多くのインプットを与え，知っている英語が増え，英語の歌が歌えたり，簡単な英語の表現が言えたり，家族と英語のゲームで遊んだり，英語のワークで遊んだりして，インプットしたものを理解し，徐々にアウトプットができるようになることを目指す。

「おやこえいご」の第一の特徴は，英語学習教材を用いるが，子どもに英語の知識を注入して「学習」させるのではなく，子どもに多くの英語のインプットを与え楽しく遊びながら，自然に英語を「習得」するように内容に工夫が凝らされていることである。日本という文化圏の中で育つ子どもの発育過程を考慮し，子どもの興味にフィットする「テーマ」「シーン」を設定して，表現と語彙を選定している。また，「こどもちゃれんじ」で子どもたちに馴染みのあるキャラクター「しまじろう」を登場させ，英語という未知の世界を親しみやすくしている。第二の特徴は，保護者である親を子どもの英語学習の支援者としてしっかりと位置づけているこ

とである。英語が得意でなくても，子どもの学習に上手く関われるように遊びをシンプルにし，親向けに教材活用ガイド冊子を配送している。子どもを褒める英語の様々な表現も毎回冊子に紹介され，親がこれを習いながら子どものために使うように勧めている。

3. 子どもの英語学習の実態調査の結果と考察

2005 年5月～2006 年3月にかけて，「おやこえいご」の『すてっぷ』(4歳～5歳向け)と『じゃんぷ』(5歳～6歳向け)を受講した4歳～6歳の子どもたち(各3名)が各家庭で英語学習する様子がビデオ録画された。このデータに基づき，幼児の英語学習の実態を観察した[注1]。その結果を，まず教材別に，次に幼児別に記述し考察を述べる。

3.1 教材別観察

■ビデオ(DVD)教材

ビデオには，各月の学習表現(例：Hello. I'm sorry. I'm hungry. I like … Are you hungry? I want …)をはじめ，歌(聞く・歌うタイプとダンス・手遊びタイプ)，音遊び，物語，付録教材の使い方の説明などが収録されている。子どもたちは全員ビデオの内容に興味を示し注視していた。疲れてソファに横になっても，目でしっかりと画面を見続けていた。ユーモアに反応し笑うなど表情が豊かだった。画面を見ながら，歌や音楽に合わせて，楽しそうに体を動かしていた。人間や人形が登場する場面，アニメーションが使用される場面などが，短時間毎に提示される構成となっており，子どもの短い集中力にフィットしているようだった。

「歌」のコーナーでは，聞き慣れている ABC の歌や，リズミカルに簡単なフレーズが繰り返されるものは，音楽に合わせて，ほとんどの子どもが大きな声で歌っていた。アニメーションで見た男の子の動作をまねして，全部歌える子どももいた。日本語で曲を知っていても，英語の歌詞が比較的難しいものは歌わず見続けていたり，日本語で歌ったりした。歌えなくても，リズムに合わせて体を動かしているだけでも楽しそうだった。

「えいごでうたっておどろう！」(『すてっぷ』に収録)や「えいごでたいそう」(『じゃんぷ』に収録)のコーナーでは，英語の歌に合わせて，インストラクターの振付を真似て，ほとんどの子どもが楽しそうに体を動かしていた。日本語で指示を与え，子どもが英語の曲にのせて体を動かすことに集中できるように工夫されていたが，動きが難しくなると，子どもは動作に集中し英語で歌わなくなった。ボール運動もあり，ボールを用意したが，ビデオを見ていた居間が狭く思うようにできなかった子どももいた。

「いえるかな」のコーナーでは，映像に現れる物の名前を言う練習をしたが，ほとんどの子どもたちが，ちゃんと口を動かし英語で正しく発声していた。ビデオの展開を覚えていて，物が出てくる前に英語で答えられる子どももいた。子どもが英語で発声できるように，時間的なポーズを設ける工夫は，このコーナー以外には，物語の中にもあった。物語の最中にキャラクターが英語で質問(例：What's your name? I'm …)する場面があったが，ほとん

注1 ビデオ録画は毎回教材到着後数回使用した後，各家庭でそれぞれの教材を使った一回分の学習活動だけが撮影された。

どの子どもが答えられなかった。ポーズが設けられていても，聞いた英語に確信が持てないと，「pepper?」のように聞いた単語を小声で言って親に確認していた。また，ビデオを見ながら，親に「～だね」と日本語で感想を言うなど，親に働きかける子どもがいた。

ビデオは，子どもが見るだけでなく，子どもに英語を発声する機会を提供できるメディアだという印象を受けた。また，親が子どもの学習を支援しやすい教材であると思われた。視覚的な情報があるので，親がビデオの英語を理解しやすく子どもの英語に関する質問に答えることができる。英語が苦手だと言っている親でも，聞こえる英語を繰り返せていたので，子どもはビデオの英語＋親の英語の2倍のインプットを得ていた家庭もあった。また，親は子どもの問いかけに，ビデオの流れを妨げることなく，タイミング良く答えることができていた。親は，「何て言ったの？」「～はどういう意味？」と子どもに質問したり，「もっと大きな声で」と励ましていた。子どもが英語の単語を言ったり，英語を歌ったりすると，「すごい」「じょうず」と褒めていた。褒められると子どもは実に嬉しい表情をしていた。子どもは親を振り返り，日本語で感想を言ったり，目線を合わせて笑顔を交わす場面も多く，親子で楽しい体験を共有していた。親が側にいると，子どもは英語や日本語の発声が増え，表情も豊かになるようだった。

■CD 教材＆ワークブック

CD には，歌，ゲームの指示，ワーク，物語などの教材が収録されている。全般的に子どもは英語の音声を楽しんでいるようだった。歌は簡単な歌詞のものであれば歌っていた。聞き慣れない歌詞の難しい歌でも，ビデオで前に映像付で聞いていた歌であれば振り付きで歌えていた。音声が視覚的記憶を呼び起こすようだった。ゲームも同様で，ビデオで見ていたものは，取り組みやすいようだった。例えば，Clap and Stamp Game は，お相撲さんが登場し，英語で果物の単語を聞いたとき手叩きを，動物の単語を聞いたとき四股を踏むゲームであった。子どもはビデオでしまじろうとお相撲さんがこのゲームをするのを見た後，自分も弟や妹と一緒にゲームをして盛り上がっていた。CD には，ワークブックの課題の指示音声も収録されていた。ワークブックを使って物語を聞くという課題もあった。ドラマティックなナレーションを聞きながら，子どもは効果音を合図にタイミングよくページをめくり，芸術的な絵を眺めて，真剣な表情で物語を聞いていた。親向けに印刷された単語を指で押さえながら音読できる子どももいた。ワークブックには，しまじろうや仲間たちのキャラクターが印刷された「Good Job（がんばったね）シール」が付いており，課題を完了させ，好きなシールを選んで貼ると，子どもはとても満足そうだった。

CD は，ビデオほどではないが，親も楽しめて子どもの学習を助けることができる印象を受けた。視覚的な情報がないため，英語を聞き取りにくくなり，英語を教えることを難しく感じた親がいるようだった。むしろ，子どもの耳のほうが敏感で，英語の歌をすらすらと振り付きで歌うのを聞いて，親の方が感動してしまうようだった。思わず親がもらす「わあ，すごいね」という褒め言葉は，子どもに優越感を与えているようだった。ワークブックには，視覚的なヒントが多いので，ビデオと同じくらい親が介入しやすい教材であるように思われた。「頑張ろうね」と親が掛け声をかけると，子どもは意欲的に作業に取り組んだ。子どもを褒めたり励ましたり，子どもの活動を見守ることで，親は子どもの学習の支援者となれるようだった。

■電子ペンで音声が聞ける学習教材ココパッド

ココパッドは，挟んだロム本の絵を電子ペンで押すと，英語の音声が出てくる「話す本」である。子どもは自分の胸ほどの大きさのココパッドを得意げに操作していた。ロム本には，英語の表現の学習内容が子どもの関心に合わせて作られたページがあり，ゲームをしながら学べるように工夫されていた。例えば，子どもは，制限時間内にアルファベットや食べ物や文房具など身近にあるものを探し，電子ペンでタッチする課題などをしていた。達成するとファンファーレと英語や日本語による褒め言葉が流れ，達成できなくても「あとひとつだったね」と慰めてくれた。ほとんどの子どもが，夢中になると無口になり，英語の発声をしなくなるようだった。また，ゲームにはたいてい簡単なレベルと難しいレベルの2段階のレベルが設置されていたが，ゲームが自分にとって難しいと感じると，子どもは簡単なレベルだけして次のゲームに移ってしまう傾向があった。しかしながら，ココパッドは，子どもが電子ペンで支配できるマシーン，頑張ると褒めてくれる友達であり，ペンで押せば絵から英語音が出てくる絵辞典などは，子どもにとって小さな英語の世界であるかのように思われた。

ココパッドには，電子ペンが1本付いており，子どもがこれを握り自分のペースで活動するので，子どもの作業を中断しないかぎり親はほとんど介入できないようだった。子どもがゲームの指示を理解できないときや，機械操作を誤ったときに，子どもが作業を中断せざるを得ないので，助けられる程度である。子どもは，自分はココパッドの所有者であるという意識があるためか，助けようとして電子ペンを取る親やパッドに触ろうとする弟や妹に立腹することさえあった。ペンを使えば使うほど英語の音声が聞けるので，子どもの意欲次第で活用度が変わる。親はビデオや CD といった教材で，子どもがココパッドという英語の小世界を冒険するための英語力を育てる支援をし，ココパッドの活動中は応援者として子どもの体験を見守る存在になるように思われた。

■玩具・紙付録

『すてっぷ』には手のひらサイズの英語クイズの機械，お風呂場でお湯に浸けると見えるが次第に黒くなり見えなくなる絵を使ったゲームシート（「おふろでえいご　でるでるシート」），『じゃんぷ』には，アルファベット・パズルや音声付ツイスター（「タッチ　アンド　ステップシート」）が玩具として付いている。使い方はビデオの最後に紹介される。食べ物や数字が描かれたカードゲームは両方のラインにあり，英語を使って家族と遊ぶことがねらいとなっている。子どもは玩具に夢中で，絵が消えてしまわないようにお湯の中に浸け続けてゲームシートを見ていたり，ぼろぼろになるまでアルファベット・パズルを使い込んだりしていた。カードゲームは，父親が参加し盛り上がる家庭があった。カードゲームは，子どもが家族と一緒に行うとき，小さな英語使用空間を作り出してくれるような印象を受けた。この空間の中で，子どもが遊びを通して家族と英語を使って楽しい体験ができれば，英語をもっと学びたいという動機付けになるし，英語は使うものという意識が育つだろう。また，Good job! など，対人的コミュニケーション表現を使う絶好の機会となる。英語学習と堅苦しく考えず，子どもと英語を使って楽しく遊べる親は，そのような面でも子どもの助けになれるようだった。

3.2　幼児別観察

■『すてっぷ』Sくん（コース開始時4歳5ヶ月）

（1）プロフィール：『おやこえいご』は外で遊べないとき，夕飯の支度時に1回 20 分～30 分する。コース開始前，6ヶ月～7ヶ月頃からほとんど毎日 NHK教育テレビの英語の番組を見ていた。また2歳から英語のビデオを見ていた。長男で妹がいる。3年保育の幼稚園に通っている。母親の観察による子どもの性格は，「長所は明るくやさしいこと。短所は頑固であきらめが早いこと」。好きな遊びは，電車遊びと外遊び。ひらがなに興味を持ち，テレビや本などの文字を読んで教えたり質問したりしていた。英語以外の習い事はない。母親は英語が苦手だが旅行程度の英語はできる。

（2）学習活動：メディア全般に渡って，自発的な英語の発声はあまりなかった。日本語もあまり発声しなかった。反面，母親がビデオを見ていて「何て言ったの？」と聞いたりすると，頻度が低い単語(crayfish, snail など)でも，常に英語で正確に言うことができた。英語で年齢や物の数を聞き取ること，数を使って英語で遊ぶのが得意だった。コース開始当初，ビデオで紹介された英語の歌 A Sailor Went to Sea, Sea, Sea を振り付きで流暢な発音で完璧に歌うことができた。母親が「すごいね」と褒めると嬉しそうな表情をした。ゲームの中で一番楽しそうだったのは先述したお相撲さんの四股踏みだった。ココパッドが好きで，使うときはいつも真剣でほとんど無口だった。「レストランへきたよ！」で，電子レンジを使ってさまざまな料理を調理する遊びがあったとき，例外的にSくんがお母さんに働きかける会話があった。Sくん：「おかあさんはなににする？」 母：「そうねえ Pizza!」（Sくんはココパッドで調理して） Sくん：「はいどうぞ」 母：「ありがとう」。ほとんどが日本語の会話であるが，お母さんが英語で料理を言っていること，ココパッドという英語の世界で S くんがお母さんに対して働きかけ，料理を作ってあげる心温まるやり取りがあったことに注目したい。また，「おかしのいえ」では，指示が理解できなかったために作業を上手くこなすことができず，ココパッドに「もうバカッ」と八つ当たりした。ココパッドが好きなあまり，ココパッドに褒められないと意気消沈してしまうようだった。Sくんの学習には，お母さんがいつも側にいた。Sくんは英語を発声することはあまりなかったが，お母さんが「何て言ったの？」と聞くと発声した。Sくんが反応すると「すごいね」「やった」とお母さんは常に褒めていた。妹も一緒にビデオを見たりゲームに参加したりして楽しい雰囲気だった。

（3）学習効果：自発的な英語の発声は稀だが，単語レベルの英語の発音はネイティブライク。英語を聞き取る能力がある。語彙（物や数を表す語）力がある。数を使って英語の遊びを楽しめる。言葉を使って他者に働きかけることができる。

■『すてっぷ』Tくん（コース開始時の年齢不明）

（1）プロフィール：「おやこえいご」は平日の夕方1回30分程使う。コース開始前，1歳2ヶ月～2歳頃まで英語のビデオを週1回見ていた。長男で弟がいる。ビデオを通した筆者の観察では，明るくやさしく失敗にめげない性格。ピアノとスイミングを各週1回習っていた。母親は英語が苦手。

（2）学習活動：どんなメディアを使っていても，Tくんはいつも身を乗り出し生き生きと取り組んでいた。疲れた素振りもまったくなかった。音楽とダンスが好きで，振り付けをまねして

歌っていた。動きが複雑になると歌えなくなったが，最後まで楽しそうに体を動かしていた。「おとあそび」も歌った。聞いた英語をよくまねていたが，ビデオを見ているときなど，感じたことを日本語で言うことも多かった。神経衰弱のカードゲームで “They match.” “Oh, they don't match.” と感情を込めて自然に使うことができた。ココパッドでも相手に丁寧に要求するときの表現 please が言えた。Good job を右手の親指を立てて言うことができた。また可算名詞につける冠詞 a を使うこともできた。ビデオを見ていて，与えられた情報から chopsticks などの意味を推測することができ嬉しそうだった。T くんで印象的なのは，ビデオの最後でしまじろうたちが Good-bye and see you と歌いながら踊り舞台を去ってゆくとき，一緒に踊ろうとしていた姿である。Tくん：「あー，まって，まって」（帽子を取りに行って戻り）「あーおわっちゃったー」お母さん：「ふふふ」。Tくんの学習には，お母さんがいつもいた。お母さんは Tくんに特に働きかけることはなかったが，同じソファの隣に静かに微笑みながら座っていた。Tくんの質問に応じたり，日本語の感想に肯くことはあっても，英語も日本語も発声がほとんどなく，もっぱら Tくんの活動をやさしく見守っていた。弟も傍らで楽しそうに参加していた。

（3）学習効果：英語のリズムを体感し体現することができる。単語や簡単や会話表現を理解しネイティブライクに発音することができる。語彙（物や数を表す語）力がある。数えられる物が単数であるとき a を付ける文法ルールに気づいているようだった。対人的に使うコミュニケーション表現やジェスチャーに興味を持ち，習ったものは使うことができる。入手した情報から英語の意味を推測し，意味が分かると感動できる。

■『すてっぷ』Mちゃん（コース開始時4歳 10ヶ月）

（1）プロフィール：「おやこえいご」は届いてから1週間程，園から帰宅直後1回 15 分程使う。コース開始前に英語に触れた経験は特になし。長女で妹がいる。2年保育の幼稚園に通っている。通い始めた園で毎月1時間英語の時間がある。母親の観察による子どもの性格は，「慎重で自分の気に入らないもの（上手にできないもの）はしたがらない」。好きな遊びは粘土遊びと外遊び。コース開始当時，友だちに手紙を書き，ひらがな・カタカナを多少書けるようになっていた。習い事はスイミングが週2回。母親は学校では英語が得意だったが，海外経験はほとんどない。

（2）学習活動：ビデオを注視していた。特に歌とダンスを楽しんでいた。全般的にどのメディアでも，英語の発声はほとんどなかった。気になった単語をたまに真似することがあったが，きゅうりを「キューキャンバー」と発音するなど，ネイティブのような発音でないこともあった。ココパッドが好きなのだが，課題に取り組むために必要な基礎的な知識（数を数えるなど）が十分でなかったためか，楽しめないようだった。Mちゃんが学習するとき，お母さんは側にいる気配はあったが，Mちゃんの学習にほとんど参加しなかった。Mちゃんは，ひとりであるいは妹と一緒にビデオを見ながら歌に合わせて踊っていることが多かった。ココパッドをしているときに，一度だけお母さんが学習を助けている場面があり，Mちゃんは一生懸命だった。（残念なことに，その後 Mちゃんのビデオ録画は終わってしまいコースをやめてしまった）

（3）学習効果：英語を耳と体で楽しむことができる。英単語の発音は必ずしもネイティブラ

イクではない。語彙力はあまりない。数を数えるとき日本語に頼る。

■『じゃんぷ』Mちゃん（コース開始時5歳4ヶ月）

（1）プロフィール：「おやこえいご」は DVDをほぼ毎日見る。他は適宜する。「おやこえいご『すてっぷ』」を完了済み。コース開始前，5ヶ月から英語教材セットを週3回（各1時間）見ていたが，難しくて途中で見なくなった。コースを始めてから再び見るようになった。2歳6ヶ月から英会話に通い始めた。習い事はこの英会話教室が週 1 回（50 分）。長女で弟がいる。3年保育の幼稚園に通っている。母親の観察による性格は，「女の子らしい女の子でもなく，男の子っぽくもない。気が強い子ではないので園で損することも多いようだが，お友だちもいてマイペース」。好きな遊びはアクアビーズ，自転車乗り，だんご虫を捕まえること。コース開始時，紙に何かを書くことが好きで，漢字以外（ひらがな・カタカナ・英語・数字）はいろいろと書いていた。母親は英語が苦手。

（2）学習活動：Mちゃんはお母さんから厳しくしつけられていた。ビデオを見るときも「ちゃんと座って」「大きな声で繰り返して」と注意されながら見るほどだった。お母さんの足音を聞くだけで，英語を練習する声が大きくなった。しかし，本人はいたって従順で英語学習に夢中だった。メディア全般に渡って自発的な英語の発声はあまりなかった。日本語の発声もほとんどなかった。反面，ビデオの物語を面白いと感じたり，ワークブックの課題をこなして喜ぶときは，表情がとても豊かだった。歌やダンスはあまりしなかった。Under the Spreading Chestnut Tree は楽しいアップテンポなアレンジがされていたが耳を塞いでいた。電車の中でインストラクターと子どもたちがダンスする場面では，「おかしいよね，こんなところでダンスなんて」と言う母親の言葉に頷き，体を動かすことはなかった。Mちゃんを見ていると，子どもが歌やダンスが好きであるという定説が嘘のように思えた。むしろ，Mちゃんは文字やお話が好きなようだった。歌の中でもABCの歌は大好きで，大きな声で楽しそうに歌っていた。お母さんが見守る中，ワークブックの課題に真剣に取り組み軽々とこなし，「Good Job シール」を嬉しそうに貼っていた。ココパッドでは，難しいレベルの課題を次々とこなし，例えば，居間に置かれたテレビに映っている四つの天気を電子ペンでタッチするなど，細部にわたって音を聞いていた。ココパッドに収録された物語も気になる台詞は何度も繰り返しタッチして聞いていた。「えいごおはなしげきじょう」ワークブックで，CD を聞きながら物語を聞く課題では，Roly-Poly Pancake（『にげだしたパンケーキ』）の話の一部を，親向けに印刷された英単語を指差しながら，音読することができた。学習時，お母さんはたいてい側にいたが，この音読に関しては，お母さん自らが単語をトントンと指差して M ちゃんに見せて指導していた場面があった。ゲームになるとお父さんが登場した。カードを使った神経衰弱ゲームでは，“They match.” “Oh, they don’t match.” の表現を使い，大いに盛り上がった。お父さんは日本語で数字を読んでしまいお母さんに「英語で」と注意されるほどだった。結局 Mちゃんは負けてしまったが，終始笑い続けとても楽しそうだった。

（3）学習効果：単語および短文レベルの英語を理解しネイティブライクに発音することができる。物などの具体的な意味を表す語を単独で理解し発声するだけでなく，感情・状態を表す語を文に埋め込んだ形（I’m happy. I’m thirsty/hungry.の形）で理解し発声することができる。語彙（数・物・職業・感情・状態を表す語）力がある。自発的に英語を発声することは

あまりない。英語音に反応する機敏さが，歌やダンスよりも数字や文字に結びついている。英語を聞きながら，リズムに合わせて聞き取り，書かれた単語を読むことができる。英語で物語を聞いたり読んだりすることが好き。ワークブックの課題をしっかりこなすことができる。

■『じゃんぷ』Rくん（コース開始時5歳 11ヶ月）

（1）プロフィール：「おやこえいご」は土日の休みの日や午後に1回30分程度。コース開始前の英語学習は特になし。長男で妹がいる。3年保育の幼稚園に通っている。幼稚園で英語を毎月 2 回（各 30 分）習っている。習い事はスイミング。母親の観察による性格は，「やさしくて甘えん坊。泣き虫。」好きな遊びはムシキングのゲーム。クワガタ，カブトムシ。コース開始時，文字に強い興味を持っており，紙に書いたりしていた。100 まで数えられ，新しく覚えた言葉も意味も知らずに使ったりしていた。母親は英語が苦手だが，旅行程度の英語はできる。

（2）学習活動：メディア全般に渡って英語の発声が多かった。最初はお母さんを見て自分の理解が正しいかどうか確認することが多かった。お母さんに頻繁に日本語で感想を伝えていた。中盤「えいごもなかなかおもしろいねえ」とコメントした。学習時，お母さんはいつもRくんの側にいた。ビデオを一緒に見るとき，お母さんは聞こえてくる英語を繰り返し言っていたので，Rくんはビデオとお母さんの両方から2倍英語を聞いていた。お母さん自身が教材を楽しんでいたのかもしれないが，子どもが不安そうに自分の方を見るので，お母さんなりに英語が聞こえるようにとRくんを助ける工夫をしていたとも考えられる。お母さんが側にいたので，Rくんは楽しい場面があると，お母さんと目線を合わせて一緒に喜ぶことができた。お母さんが楽しそうにビデオを見ている姿を見てRくんも楽しい気分になれたようだった。お母さんは英語が得意ではなかった。英語の発音も日本語訛りがありrとlの区別ができなかった。あるとき Rくんがそのことに気づき「slide っていったよ。いったのに」と言ったことがあった。お母さんは「sride」と発音していたが，そのことに気づかなかったようだ。妹も一緒で楽しそうだった。

（3）学習効果：単語および文レベルの英語を理解し，ネイティブライクに発音することができる。物などの具体的な意味を表す語を単独で理解し発声するだけでなく，感情・状態を表す語を文に埋め込んだ形（I'm happy. I'm thirsty/hungry.の形）で理解し発声することができる。語彙（数・物・職業・感情・状態を表す語）力がある。比較的頻繁に発声し持久力もある。英語音に反応する機敏さがある。英語の微妙な音を聞き取ることができる。他者と日本語でコミュニケーションすることを楽しめる。

■『じゃんぷ』Nちゃん（コース開始時5歳 11ヶ月）

（1）プロフィール：「おやこえいご」は土日の午前中や平日幼稚園から帰宅直後 1 回 30 分程。コース開始時6歳。コース開始前に英語教材のサンプルビデオを見ていたことがある。長女で弟がいる。2年保育の幼稚園に通っている。母親は英語が得意でイギリスに1ヶ月滞在した経験がある。母親の観察による子どもの性格は明るく元気で，喜怒哀楽をきっちりと表現するタイプ。好きな遊びは6歳の誕生日にもらった自転車に乗ること。おうちごっこ。絵を描いたり手紙を書くこと。開始時，ひらがな，カタカナはほとんど読み書きができるが，数

字はまだ書けなかった。習い事はスイミングが週 1 回(60 分)。

(2)学習活動: 歌とダンスが好きで，ビデオを見ながら，振付を真似て弟と楽しそうに体を動かしていた。ココパッドが好きで，時間制限のあるものは，特に意欲的に取り組んでいた。ココパッドで英語を使っているときの表情が自信に溢れていて満足そうだった。反面，自分にとって難しいレベルの課題，関心のない課題には取り組まない傾向があった。学習時，お母さんが側にいた。当初ココパッドに取り組む N ちゃんが，指示が分からず困っていると，電子ペンを取って「こうするのよ」と見せることがあったが，N ちゃんはそんなお母さんに立腹した。N ちゃんを自立した学習者として尊重することにしたのか，お母さんは次第にあまり関与しなくなっていった。自分でやろうとするので，ツイスターゲームやカードゲームも指示が分からず，あまり楽しめない場面もあった。N ちゃんの自我の強さが，親の介入を妨げている印象を受けた。

(3)学習効果: 単語レベルの英語の発音はネイティブライク。比較的語彙(数・物・職業・感情・状態を表す語)力がある。英語を発声することはあまりない。英語音に反応する機敏さがダンスに結びついている。

4. 幼児向け英語学習教材を使用する際の留意点

以上「おやこえいご」の学習教材を用いた幼児の事例の観察に基づき，家庭における幼児向け英語教材を活用する際の提案を述べたい。

第一に，親は子どもを放任しないこと。子どもの英語学習活動を見守り，子どものニーズに応じてサポートしてあげること。幼児向け英語教材は，子どもの興味を中心に据え，音声や映像を効果的に用いて造られていることが多い。しかし，子どもは未知の世界を恐れず耳も鋭敏であるから，工夫された英語教材であれば，楽しく自然に英語を吸収するという考えは誤解である。観察の結果を見ても，親が側にいなかった子どもは英語をあまり習得することができず，結局学習を継続させることができなかった。日本語とは異なる英語の音を聞いて，子どもは不思議さを感じる。聞きそびれたり，意味が分からなければ不安になることもある。幼い子どもは親が大好きだ。不安なとき，親が側にいて，楽しそうにしていてくれれば子どもの緊張がほぐれる。親が質問に答えれば，子どもは英語が分かり安心し嬉しくなる。教材別に見ると，ビデオは親が子どもの英語学習に比較的簡単に介入できるメディアであるようだ。親は英語が苦手でも構わない。一緒にビデオを見て，子どもが英語は楽しい，英語はこんな言葉なのだという体験ができるよう支援してあげて欲しい。

第二に，親は子どもの英語学習の成果を早急に求めないこと。子どもの母語習得を見ても，母語を使ってコミュニケーションができるようになるまでに，かなりの量の，そして有意味なインプットに触れていることは明らかである。観察の結果，メディア全般に渡って，幼児は英語を自発的に発声することはあまりなかった。しかし，英語の意味を尋ねられると，ほとんどが答えられていた。英語を発声しなくても，英語教材から得られる限られたインプットを活用して，子どもは子どもなりに最大限の学習をしている。ビデオを見ながら，英語を真似て言うことがあったら褒めてあげて欲しい。「何なの？」と聞いて答えられたら褒めてあげて欲しい。それらは学習の証拠である。「歌を歌えたところで，英語の授業で評価されるわけでもないし」と見切らないことだ。歌を歌うことで，音感が養われ，英語の耳や英語を発声するた

めの口の筋肉が鍛えられている。子どもは親が気付かないところで意外な成長を遂げている。親は子どもを褒めながら，気長に英語の成長を見守って欲しい。

第三に，親は子どもの日本語の使用を妨げないこと。観察から，子どもが，英語学習をしていて日本語で感想を口にしたり，英語の質問をする様子がうかがえた。英語を習っているのに，日本語を使ってはいけないのではないかという声がある。しかし，英語活動の際に，子どもを英語漬けにして，日本語を一切使用させないように制限するべきではないのではないか。日本語で子どもが親とコミュニケーションが取れる状態にしておけば，親は子どもを支援しやすくなり，子どもの学習は捗るし，学習意欲も持続するだろう。内田(2000)は，「言語・非言語にかかわらず，やり取りの機会のない子どもの場合は，生活年齢にふさわしいコミュニケーション技能を育むことができず，愛着も形成されない」(p.41) と述べている。英語を習うことで，日本語の発達が阻害されるのではと心配する親がいるが，英語活動を通して日本語のことばのやり取りの機会が増加すれば，子どもの日本語のコミュニケーション力も人間関係を結ぶ能力も助長される可能性がある。英語学習活動の最中であっても，S くんのように，ココパッドでお母さんに料理を作ってあげるやり取りは，日本語が使われていても感動的である。英語を学習させることで，英語のモノリンガルを造るのではなく，日本語と英語のバイリンガルを造ろうとするのであれば，日本語の使用は妨げるべきではないだろう。

第四に，親は子どもが英語に触れる機会を与えてあげること。家庭における幼児の英語学習は，教室とは異なり，他者がほとんど介入しない親子が向き合う空間である。先生のような親，先輩のような親，同級生のような親など，いろいろなタイプの親がいる。子どもにも多様な個性がある。観察の結果，親が音声志向型であると，子どもも歌などの音声を志向し，親が文字志向型であると，子どもも文字を志向する傾向があるようだった[注2]。しかし，いずれの家庭でも，ビデオデッキを子どもが見やすい場所に置き，ココパッドやワークブックに取り組むときは下の子どもが邪魔をしないような時間帯や場所でさせる配慮があった。また，カード教材を用いて，子どもが習った英語を実際に使えるように家族で英語を使って遊んでいた。たとえ少量の英語でも，英語を使って楽しいことをするという体験は子どもにとって貴重である。英語を科目として学習した親は，英語で遊ぶことが苦手かもしれない。子どもの中に，英語は学んで楽しいものという感覚に加えて，使って楽しいものであるという感覚を育てるために，英語を使って子どもと一緒に遊んで欲しい。学習教材以外にも，外国人と会ったり，English Day や English Camp に参加したり，外国に行くなどの機会があれば是非活かして欲しい。

5. 結語

内田（1999）は「言葉を獲得することは人間となることである」と述べている。日本語に加えて英語も習うことは，人間形成において有益であると考えられる。Cummins（1984）は「二言

注2 幼少の子どもでも文字に関心を抱き，文字活動ができるようだ。英会話よりも英語の読み書きに自信がある親は，そのような子どもを支援できるだろうが，文字を音や体で体感させるような工夫は必要だろう。

語基底共有説」を提示し，バイリンガルが有する二つの言語は，それらの表層上の違いに関わらず，根底の部分で言語を思考の道具として用いる能力を共有しており，二つの言語でこの部分を鍛えているので，バイリンガルの思考は柔軟で言葉の創造性があり，有能なコミュニケーターとしての特質を有していると述べている。それでは，日本人の幼児にどのように英語を教えたらよいのか。田島＆田島（2000）は，幼児の外国語習得の理想の形は，知識を詰め込む「学習」ではなく，遊びのような体験を通して自然に身に付く「母語習得」であることを指摘している。子どもは「最初は必ず外的な人間関係におけるコミュニケーションから出発して，それを相手がいないときに，頭の中で繰り返して，相手のことばを借りて，具体的に現場で使ってみて意味を確定する」(p.99) 過程の中で母語を獲得すると述べている。日本のように英語が日常語として使われていない環境では，母語獲得のように英語習得が人間関係におけるコミュニケーションで始まることはあまりない。しかし，アレン玉井（田中・アレン玉井・根岸・吉田 2005 p.38)も，幼児の場合，英語を受け入れるには，身体感覚として英語を捉える必要があり，その際音楽性や現場の活動との関連性，さらに関わる人間同士の連帯感が必須条件となると述べている。最近は，「おやこえいご」のように幼児向けに開発された英語学習教材が手軽に購入できるようになったが，それを家庭学習で活かせるかどうかは，親子の人間関係や連帯感の結び方次第であるように思われる。英語を外国語として学習した経験のある日本人の親は，歌やカードといったものは自分にはなじみが無いかもしれない。英語が苦手だったかもしれない。しかし，観察した親子は，一つの例外を除いて，皆英語活動を楽しんでいた。親は子どもの視点から英語を見直すことで新しい発見があったのかもしれない。子どもの英語の素晴らしさに感動を味わっていたのかもしれない。子どもも，家事や仕事で疲れ果て，弟や妹に構いっぱなしの親ではなく，にこにこ笑いながら親が一緒に勉強してくれて嬉しかったのかもしれない。親子で英語活動を通して，楽しくことばのやり取りをするうちに，子どもの中に少しずつ着実に英語が蓄積されてゆくのではないか。中島（2001）は子どもの英語教育に 20 年かけることを提案しているが，その最初の体験が，その先 20 年を支える楽しくしっかりしたものとなることを願っている。

参考文献

Cummins, Jim 1984. *Bilingualism and Special Education: Issues and Assessment and Pedagogy.* Clevedon: Multilingual Matters.

田中茂範・アレン玉井光江・根岸雅史・吉田研作（編著） 2005.『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組みーECF』リーベル出版.

内田伸子 1999.『発達心理学:ことばの獲得と教育』岩波書店.

田島信元＆田島啓子 2000.『育つ力と育てる力 英語で子どもが元気になった！:子育てとことばの発達心理学』ラボ教育センター.

中島和子 2001.『バイリンガル教育の方法:12 歳までに親と教師ができること』増補改訂版 アルク.

八代京子 1991.「ファミリー・バイリンガリズム」ジョン・C・マーハ＆八代京子（編著）『日本のバイリンガリズム』(p.p. 93－123) 研究社出版.

山本雅代 1996.『バイリンガルはどのようにして言語を習得するのか』明石書店.